

私はその人と書くだけで先生と呼ばんでいた。だからここでもただ先生と遠慮。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたい。頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来いという端書を受け取つたので、私は多少の金を工面して、出掛けの事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられてゐた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざわざ避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども実際彼の母が病氣であるとするれば彼は固もとより帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覺悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変り

5

10

15

20

25

30

[illegible]